

力位取りに気を付けながら、繰り上りのあるたし算ができるようになつた。

幼児児童考察会

事例2 「B児(幼稚部四歳)言葉の指導」

④ 考察

A児の数の概念形成に当たって、具体的な操作を多く取り入れ、興味関心を持続させながら繰り返し行うことは、計算力を高める上で有効である。

また、物の数え方だけでなく、あやふやだった物の名称などについても、教師が意図的に取り上げ反復して働きかけると、生活の場面で応用して使うようになる。



聾学校で学ぶ子供たちは、聴覚障害があるため、耳から自然に入ってくる情報が少ない。したがって、意識的に相手の話を聴こうとする態度(傾聴態度)がないと、言葉の獲得や他者とのコミュニケーション関係に大きな支障をきたすようになる。

そこで、B児の傾聴態度の育成と引率者である母親への依存的態度を改善するためのかかわり方はどうあればよいか話し合い、次のような指導方針を立てた。

ア 傾聴態度の育成

話しへに注目させるために、意図的に「話を聞かずに行動し失敗する場面」と「よく聞いて行動し、うまくできてほめられる場面」を設定する。

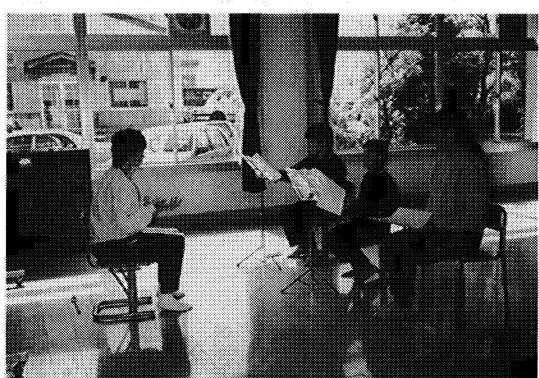
イ 母親の判断ではなく、自分で判断して行動できるようにするために、次のことを行う。

- ・絵カード提示による指示

- ・本児と母親や教師との位置関係の工夫

- ※ 母親とのかかわり方をする。

ウ 家庭におけるかかわり方につ



④ 考察

保護者(母親)と教師が、養育方針について共通理解を持ち、意図的な場面を多く設定して子供にかかわれば、子供は自信をもつて他人に頼らざり行動しようとする気持ちが芽生える。

なってきた。

声を出し、生活場面で使える言葉が多くなってきた。

ウ 意にそぐわないことがあっても、長引かずに気持ちの切替ができるようになつた。

④ 考察

保護者(母親)と教師が、養育方針について共通理解を持ち、意図的な場面を多く設定して子供にかかわれば、子供は自信をもつて他人に頼らざり行動しようとする気持ちが芽生える。

五 おわりに

個別の指導計画は、試行錯誤を繰り返しながらの作成だったが、指導経過の中で次の活動への見とおしがも、全職員の共通理解を図る意味でも大きな自安と励みになった。今後とも、小規模校の特色を生かしながら「何がどこまでできたか」「何をどうするのか」を明確にした指導を継続していきたい。